アウグスブルク滞在記

松田美里

はじめに

約14時間にわたる空の旅を終えミュンヘン空港に到着したとき、私の胸はワクワクとドキドキでいっぱいだった。それと同時に初めてのホームステイでホストファミリーと英語でのコミュニケーションがとれるかなど、不安な気持ちも抱えていた。しかし、このネガティヴな心情は一瞬にして消え去り、私にとってこの１週間は驚きと感動に満ち溢れた、かけがえのないものとなった。

１日目

　ミュンヘン空港から1時間ほどバスに揺られてホストファミリーと対面した。とても緊張していたが、ホストファミリーが暖かく迎え入れてくれたお陰で長旅での疲れが吹き飛んだ。その後、Plaineëに連れて行ってもらった。ビールガーデンのようなものだとホストファミリーが説明してくれていた。そのため、スケールの大きさ・遊園地のようにアトラクション多さから、まるでドラマの中の世界に足を踏み込んだかのようであった。ドイツ発祥のホットドック（チリソーセージ）を食べたり、観覧車に乗ってドイツの街並みを堪能したりした。観覧車は日本とは異なり、ゆっくり一周するのではなく、ある程度のスピード感で10周くらい回転した。そのため、こんなところにも文化の違いがあるのかと驚いた。



２日目

　私たちがドイツ滞在するいちばんの目的であるディーゼル記念公園を訪れた。ドイツ語で書かれた石碑がいくつもあったが、一文字も読むことができず、お話だけを聞いて理解しなければいけなかった。今度ドイツに行く機会があった時には、ドイツ語で石碑の内容を理解できるようになりたいと強く思った。近辺の日本庭園にも訪れたが、またもや木々の高さや池泉の広大さに、日本の庭師によってデザインされたものとはいえ、日本のものとはまた違う美しさに魅了された。フッゲライでは、フッガー家によって１６世紀初頭に建設された低所得者のための集合住宅を見学した。現存する世界最古の社会福祉住宅として今もなお稼働していた。500年ほど経った今でも、一定の基準を満たした人は創設当時と変わらず年間0.88ユーロで住めるということだった。しかし、ユニークなことに夜は裏門の通過料金が年間の家賃を上回るのだそうだ。暗闇でもわかるように各家庭でドアベルのデザインが異なっており、数百年前の建築物とは信じられないほどであった。お昼ご飯には、Schweinsbraten（ローストポーク）を堪能したが、サイドにはKartoffelklößと呼ばれるジャガイモ料理が添えられており、ボリューム満点だった。午前中だけでこのような素敵な見学に行くことができ、お腹も満たされたため、午後からのツアーでは眠気と戦うこともあった。夜には、ホストマザーのご両親の家に連れて行ってもらった。そこでは、Zwetschgenkuchenというプラム屋内, 窓, テーブル, 車 が含まれている画像

自動的に生成された説明が乗った美味しいケーキを用意してくれていた。生クリームやラズベリーとの相性は格別だった。また、テキスタイル博物館で作られた生地やアウクスブルクの説明が書かれた本としおりをプレゼントしてくれた。とても温かく歓迎してもらえて本当に嬉しかった。

３日目

　今日はレセプションがあった。通常ならアウグスブルク市役所内の「黄金の間」で執り行われるはずであったが、工事中のため「ロココホール」での開催となった。ドイツ・ルネッサンスの最高傑作とも評される「黄金の間」に入ることができなかったものの、ロココホールの美しさに感動した。その後、市内で一番大きな図書館へ向かった。そこには、日本の漫画なども置かれており、ドイツとのつながりが感じられて嬉しかった。私の想像を遥かに超える広さで、各階にはコワーキングスペースなども各所に設けられており、学校終わりの子どもたちの姿も多く見受けられた。本以外にも、ゲーム機や楽器、ミシンなどの家電製品まで借りることができるそうだ。図書館で購入するかどうかを検討できるシステムが導入されているのはすごく画期的だと思った。昼食後には、民族衣装であるディアンドルを試着した。着用するまでに時間がかかり、日本の着物と同じように昔の人の衣服は現代と比べて複雑な構造が取られているのではないかと考えた。髪飾りは衣装のデザインによって異なっており、私のものは大変重く、落としてしまわないか緊張した。家へ帰ってからホストファミリーにこの写真を見せたところ、中世の貴族のウエディングドレスだと聞かされた。少し驚いたが、それも貴重な体験であり、良い思い出として記憶に留めておきたい。

人形劇博物館にてマリオネットの歴史や人形を操る体験などをした。想像以上に難しく、思い通りに動かせないどころか、人形に変な動きをさせてしまいみんなでたくさん笑った。その後は、ドイツの青年使節団の人たちと共にフランスの郷土料理であるタルト・フランベを作った。私のホストブラザーたちは2人とも青年使節団の一員であり、Florianと同じ班になり共同作業を通してまた少し仲良くなれた気がしてよかった。

４日目

人, 屋外, ポーズ, 写真 が含まれている画像

自動的に生成された説明　シンデレラ城のモデルとしても知られているノイシュヴァンシュタイン城へ行った。この城は山頂に位置していることもあり、バスで移動し、帰りには馬車を使って景色を楽しんだ。

城内では、ルートヴィヒ2世の当時の豪華な生活を垣間見ることができた。ヴィース巡礼教会では、天井から壁に至るまで施された装飾がとても繊細でとても目が惹きつけられるものであった。建物内の空間にいるだけで息を呑むような神秘的美しさであった。

また、敷地内にて放し飼いされたニワトリを間近で、そして車内からも牛を見ることができ、天気には恵まれなかったものの大自然を体感することができた。また、市役所の方が軽食にとSchmalznudel（シュマルツヌーデル）と呼ばれるドイツの揚げパンをくださった。日本のものとは違い、丸く薄く広がった形をしていたこともありサクサクな食感で面白かった。夜ご飯にはパセリの入ったホワイトソーセージとプレッツェルを食べた。ソーセージには粒マスタードをつけて食べた。脂質が少なめだったが味に深みがあってとても美味しいものだった。食後には、ドイツのクレープ、パラチンケンを用意してくれていた。クレープ生地にヌテラやアプリコットのジャムなどをトッピングしてクルクル巻いて食べた。日本のクレープは生クリームやフルーツなどで構成されるのが一般的だが、ジャムやチョコと一緒に食べるとよりあっさりしていて食後にも関わらずおかわりしてしまった。。。食事を終え、ホストマザーの弟さんが家に来て、ドイツと日本の違いについて話した。ドイツでは電車が遅れることが日常茶飯事で、日本とは違って臨時列車も動かない為、電車が1〜２時間程度遅延することもよくあるそうだ。また、権利として保証されているため有給は全て使い切るのが主流らしい。ホストファミリーに限らず、ドイツの市役所職員の方も長期間の旅行を楽しむと話していたのを思い出した。日本では旅行と聞くと数日間で楽しむことが多いが、1ヶ月間程度の旅行を計画し、訪れる国の行きたいところを全て周るのだそうだ。私も日本がいつか与えられた有給を全て消費できることが当たり前の社会になればいいなと感じた。

５日目

　この日は朝からHalle116に向かった。ここは、実際に第二次世界大戦前後に収容所として利用されていた施設だ。当時書かれた書類のレプリカや周囲の様子が映し出された写真などが展示されており、戦争の悲惨さを感じるとともに、二度と世界大戦が起こらないことを強く願った。続いて訪れたアウクスブルク大学では、日本語を学んでおられる学生に日本語で案内してもらった。最後には、３Dプリンタで作られたタッセルを模したキーホルダーをお土産にもらい、またドイツでの思い出をひとつ増やすことができた。ドイツ訪問の初日に、ホストファミリーからテキスタイル博物館で実際に手織りされたエプロンをプレゼントしてもらった。そのため、より機械で生地が作られるプロセスにとても興味があった。そこでは、実際に手で羊毛から糸を作ったり、Tシャツに好きな絵柄のプリントをしたりする体験をした。どちらも難しく、糸を作ろうと力を加えるとすぐに糸が切れてしまった。物を手作りすることの大変さを肌で感じるとともに、機械化が著しく発展を遂げる今も昔ながらの手法を継承し続けていることに感心した。また、2009年に新設されたFCアウクスブルクのフットボールアリーナにも訪れた。広大なサッカースタジアムには、選手や関係者、もしくはプレミアムチケットを購入しているサポーターの人しか立ち入れない場所にも案内してもらった。

選手やコーチ専用の座席はフカフカでとても座り心地がよかった。記者会見のスペースで記念撮影したり、サッカーコートを間近でみることができたりと、サッカースタジアムに入ること自体が初めての経験であったが、いつか試合を見てみたいと思うようになった。

６日目

　前日の夜は雨風が強く天気が荒れていたが、朝から雨が降っておらず安心した。はじめに行った給水塔では、建物内を見学し、17世紀に建てられ、世界中の水管理システムのパイオニアとして知られており、世界遺産にも登録されている。水路の流れを直接確認することができたり、長い歴史と給水塔の仕組みを資料や模型から学ぶことができた。

屋内, テーブル, 座る, ボックス が含まれている画像

自動的に生成された説明

続いて、職業訓練学校に向かった。ここでは、学校に通っている生徒の方々から直接お話を伺った。各職業分野への就職を目指す学生のために、実際の現場に近しい環境が整えられていた。また、食堂やフリースペース、さらには寮まで完備されていた。学校内の施設がとても充実していて、とても感動するとともに、日本にもいつかこのような学校が創設されるといいなとも思った。

最後には、今まで準備を重ねたフェアウェルパーティーがあった。スライドの接続確認や読み合わせなどの準備を終え、緊張しながらホストファミリーの到着を待った。私たちは、長浜市に関するクイズと習字体験を催した。クイズでは、1位のチームが3組現れるというハプニングはあったものの、みんなに楽しんでもらえてよかった。

７日目

　この日は、ホストファミリーと過ごす一日であった。私のホストファミリーは同じく長浜市青年施設団の団員のホストファミリーととても仲が良かったこともあり、一緒にゲオグルク教会「ダニエル」に連れて行ってもらった。全長９０mの教会の頂上まで階段で登った。塔内は螺旋状に階段が作られており、目が回りそうだった。階段数はなんと350段に及ぶそうだ。頂上からの景色は絶景で、街全体を見渡すことができた。

山の景色

自動的に生成された説明

運動してお腹が空いたこともあり、カフェでお茶をした。ケーキはどれも初めて見るものばかりですごく迷ったが、チョコレートのコーティングされたケーキを選んだ。ずっしりとしていて、食べ応えがあった。ホストファミリーと食べる最後の夕食は、Flo とBastiがおすすめしてくれた牛肉のステーキを食べた。ケーキですでにお腹が満たされていたため、完食することはできなかったが、とても美味しかった。食事をしながら、私の家族や一週間の思い出、学校のことなどについて話した。あとちょっとでお別れだと思うと、本当に悲しくて仕方がなかった。

皿の上の食事

自動的に生成された説明

最後に

　ドイツを再度訪問することは可能だと思う。しかし、１週間に渡り長浜市青年施設団の一員として、普段は立ち入ることのできない特別な場所や現地の人しか知り得ない情報の数々を学び、体験することができて本当に良かったと感じている。使節団として訪問したからこそ得られた経験であり、ここでの１週間は、私にとって一生の宝物となった。ホストファミリーを含むアウクスブルクの人々に暖かく迎え入れてもらったように、私も来年はドイツ青年使節団の方を受け入れられるよう英語、そしてドイツ語を勉強し、円滑なコミュニケーションができるようになりたい。

⚫︎長浜市の国際交流事業に協力できること

→今回の異文化交流で得た素晴らしい経験を伝えていく